

〔大東文化大学所蔵日本書跡解題〕（監修・高城弘一教授）

短冊手鑑

野中直之・前川知里・三井忠大
高橋 遥・田中春菜・神戸雅史
谷口成孝・張 煜皓

【基礎データ】

- ①請求記号：W／2618
- ②図書番号：1114206261
- ③執筆年：南北朝時代から江戸時代
- ④材質・形状：紙本墨書・折帖
- ⑤員数：一帖（計一七〇葉有、十三葉欠、ウラ面なし）
- ⑥寸法：縦三九・五センチ 横二四・二センチ
- ⑦付属品：なし
- ⑧外題：「筆陣」（装飾料紙）
- ⑨状態：良
- ⑩受入：二〇一六年度
- ⑪その他：四隅金具

【解題】

手鑑とは、古人の筆跡（手）である古筆切や短冊、色紙等を鑑賞や手習いの手本（鑑）とするために貼り込んだ帖のことを指す。江戸時代前期には多くの古筆手鑑が作られるようになり、古筆鑑定家が大きく関わっていた。鑑定家は、各古筆切を鑑定するだけでなく、手鑑行列という古筆切の配列に則って手鑑を制作し

ていた。手鑑行列ではオモテ面は伝聖武天皇筆「大聖武」（賢愚経断簡）、伝光明皇后筆「蝶鳥下絵経切」（法華経断簡）から始まり、以下天皇、親王、摂関家、公卿、御子左家、二条家、冷泉家と続き、ウラ面は聖徳太子から能書、世尊寺家、法親王、高僧、連歌師、武家、女筆へと至るのが理想とされる。

通常、このように古筆切を多数収めるものを名品と位置付けるが、当然、本手鑑では聖武天皇といった古い伝称筆者にあてられた筆蹟は収めていない。巻頭は後円融天皇から始まり、南北朝時代が最も古い部類にあたる。その後、基本的には家格に沿った手鑑行列の配列に従っているが、貼り替えの痕が多数見られ、制作当初とは所収内容が変更されているものと思われる。しかしながら、筆者の署名入りである自詠短冊が大半を占めていることから、貴重な資料であると言える。

また、本短冊手鑑の断簡に添付されている極札を見ると、古筆家である二代古筆了榮（一六〇七—一六七八）が大多数を占めているようである。また、収録される短冊の筆者を通覧しても、同様の時代から大きく外れるものは少ないようである。このことから、十七世紀中には基礎となる制作がはじまっていたものと想定される。

本短冊手鑑の解題はオモテ面を二回に分けて掲載を予定する。本年度はオモテ面のうち、冒頭の「1後円融天皇」から「93姉小路済継」までの八十七葉（欠番六葉）を扱うこととする。本解題は代表を野中直之とし、前川知里・張煜皓・高橋遥・谷口成孝・田中春菜・神戸雅史・三井忠大（執筆順）の八名による分担執筆によって行う。（各断簡の末尾には担当者名を記した。）

最後に本解題での通し番号は、現在は欠番となっている箇所も都合上一つとカウントしたうえでの番号となっている。また本解題内にて掲載する図版の縮尺率は、できる限り一定になるよう努めたが、必ずしも一定ではない。

（野中）

表紙 (題簽「筆陣」)



表 1 (1 後円融天皇 2 後小松天皇 3 後花園天皇)

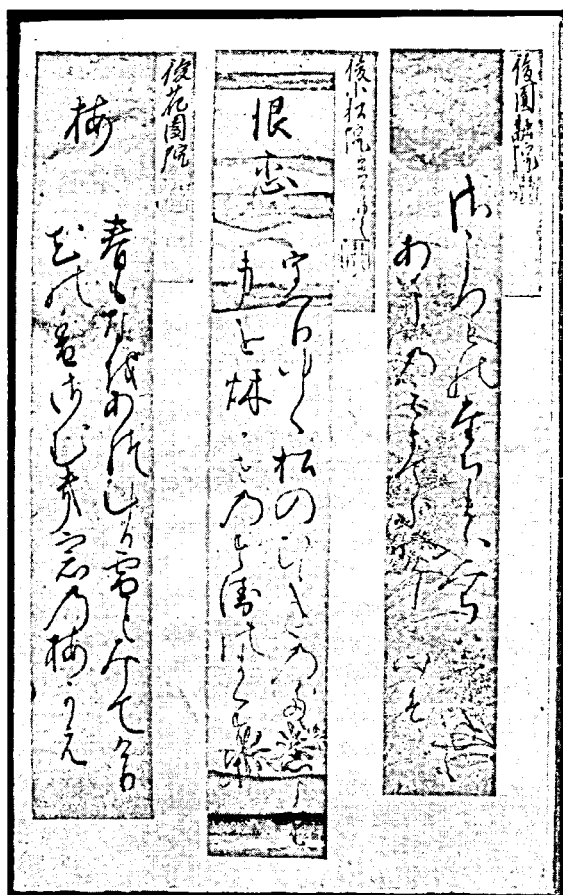


表 2 (4 後土御門天皇 5 後柏原天皇 6 後奈良天皇)

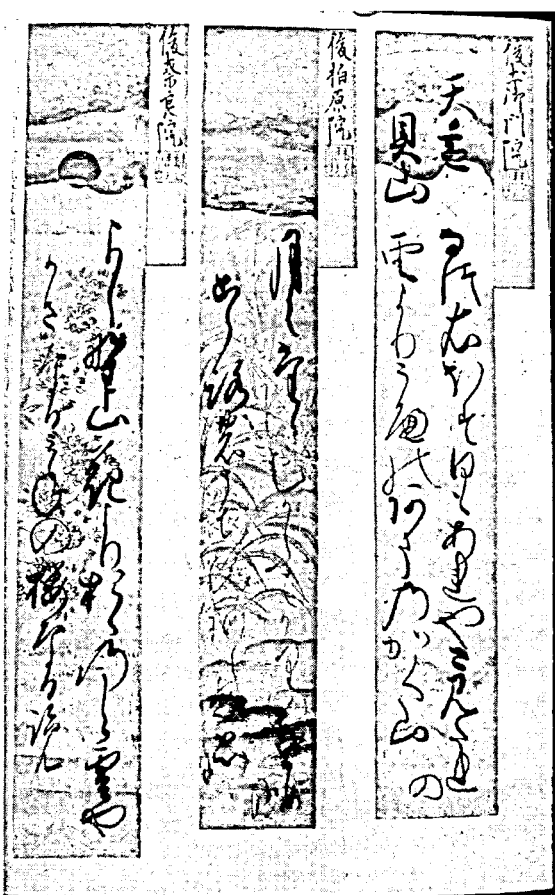


表 3 (7 正親町天皇 8 誠仁親王 (陽光院) 9 後陽成天皇)



表 4 (10 後土御門天皇勾当内侍 11 貞清親王 12 智仁親王)



表 5 (13 近衛尚通 14 近衛植家 15 近衛前久)



表 6 (16 近衛信尹 17 九条幸家 18 九条道房)

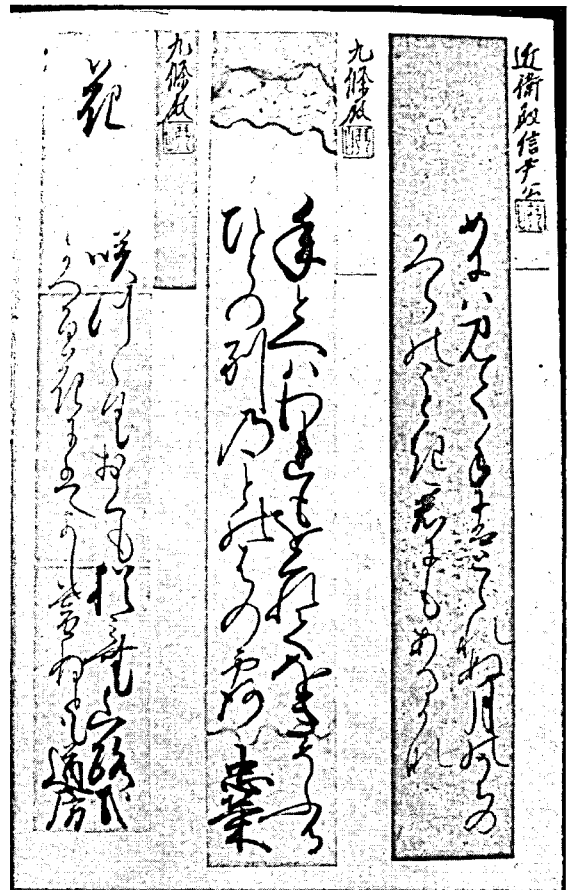


表 7 (19 松殿道基 20 二条康道 21 鷹司基忠)

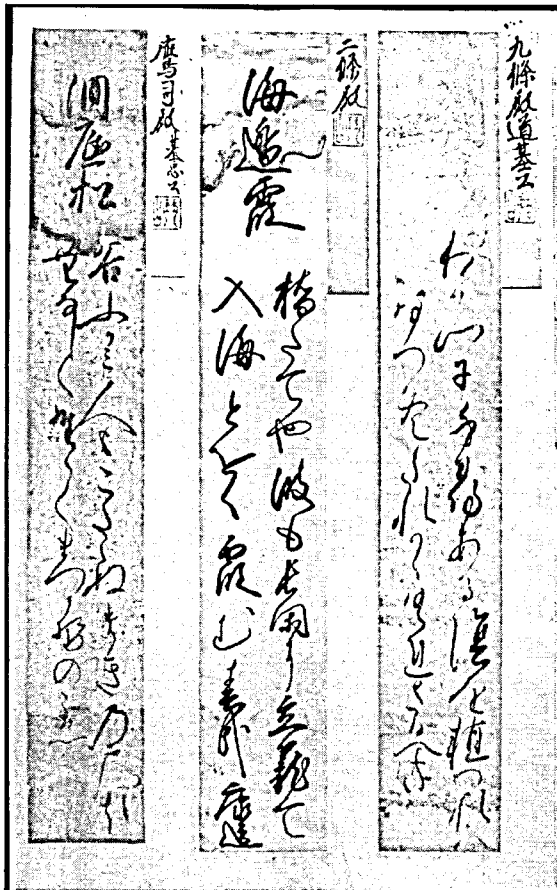


表 8 (22 花山院定熙 23 西園寺実晴 24 西園寺公義)

花山院定熙
 御光 喜多乃二十余年てや後ぬし
 花葉 くれをききとるに書極乃いと云
 西園寺実晴
 夏夜馬 夏夜馬之より形見はなれ
 西園寺公義
 心礼 喜しゆゆかきんくももよの
 くれにこころをわらふにやまの山

表 9 (25 四条隆術 26 山科言継 27 欠)

山科言継
 招雪海 初瑞雪の松の影にうたはせ
 見ぬ雪のうらみはあはれとて
 四条隆術
 雪のうらみはあはれとて
 雪のうらみはあはれとて

表 10 (28 日野資勝 29 広橋兼秀 30 欠)

日野資勝
 思兼 ひとりかきりしうらみはうら
 不いさなをいさなをいさなを
 広橋兼秀
 鶯 かくれはひさしははははは
 志のうらみはあはれとて

表 11 (31 広橋総光 32 広橋綏光 33 鳥丸光宣)

広橋総光
 秋夕 吹かきりしうらみはうら
 わさうらまのうらみはあはれ
 鳥丸光宣
 磯の鳥 ひとりかきりしうらみはう
 不いさなをいさなをいさなを
 鳥丸光宣
 時雨 ひとりかきりしうらみはう
 不いさなをいさなをいさなを

表 12 (34 欠 35 柳原資定 36 柳原■光)

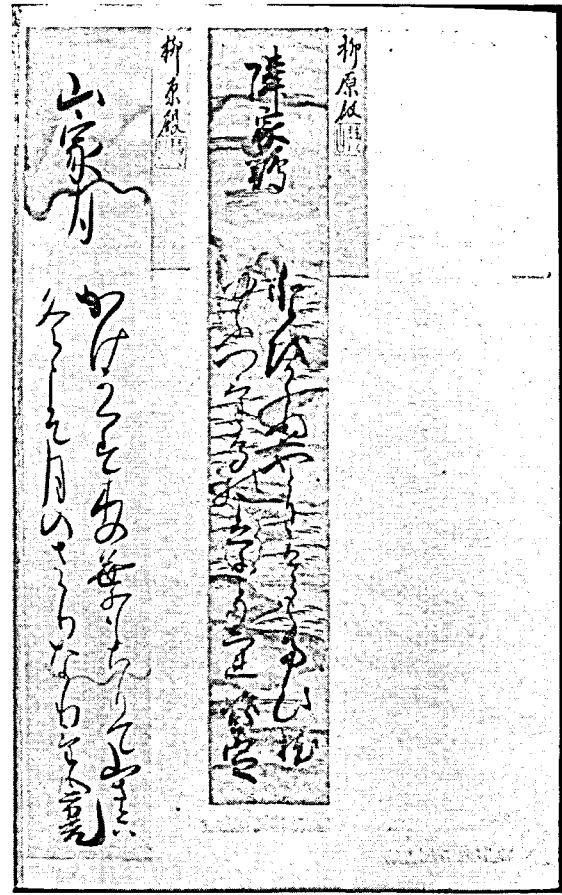


表 13 (37 柳原資廉 38 甘露寺親長 39 甘露寺元長)



表 14 (40 甘露寺伊長 41 万里小路秀房 42 万里小路惟房)



表 15 (43 万里小路綱房 44 勸修寺尹豊 45 勸修寺光豊)

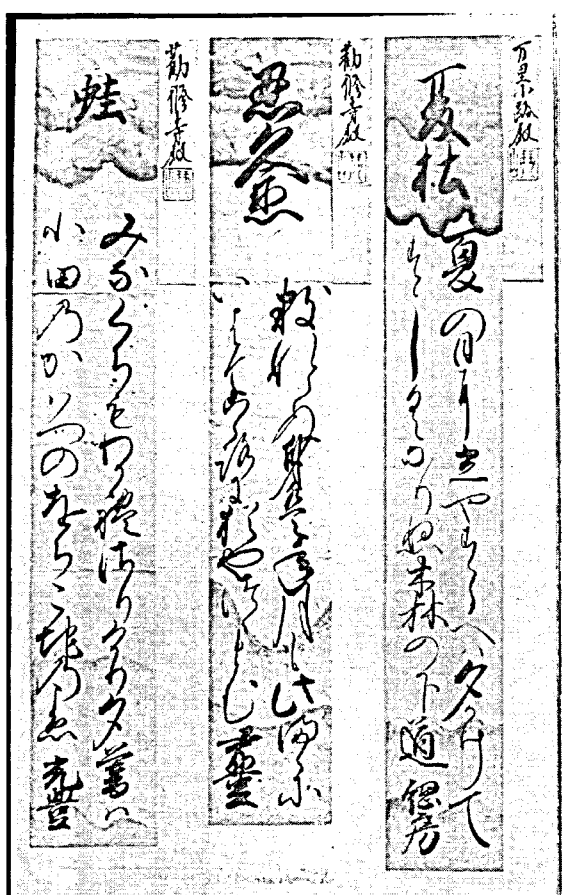


表 16 (46 中御門宣秀 47 中御門資胤 48 中御門尚良)

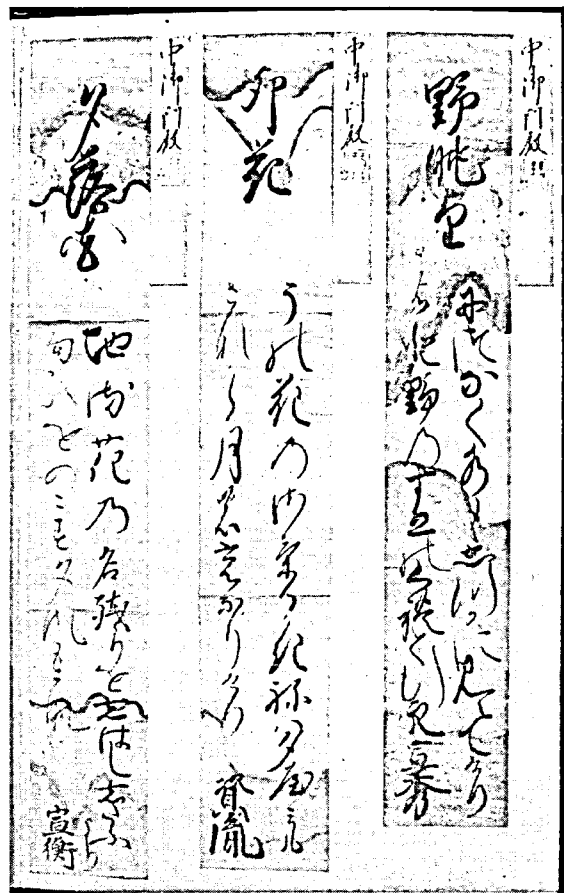


表 17 (49 高倉永相 50 高倉永孝 51 正親町三条公仲)

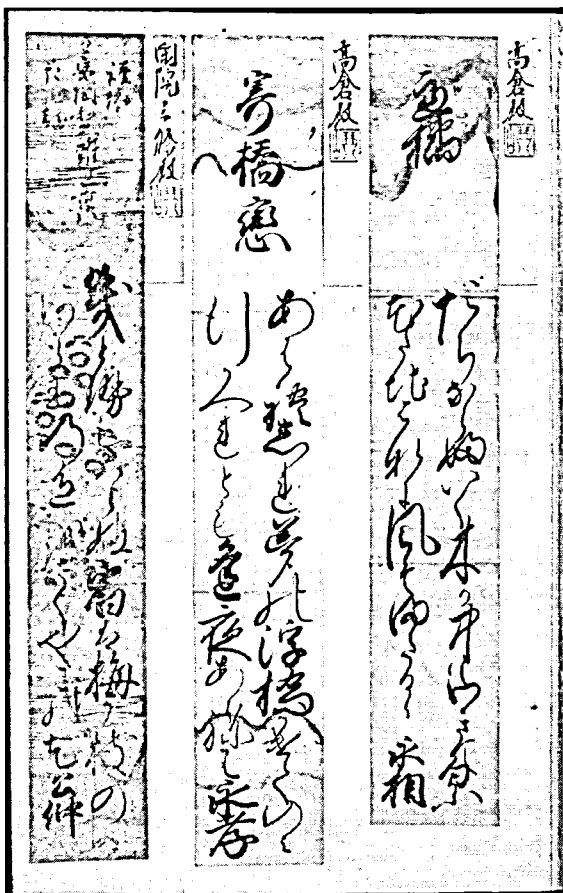


表 18 (52 三条西実隆 53 三条西公条 54 三条西実条)

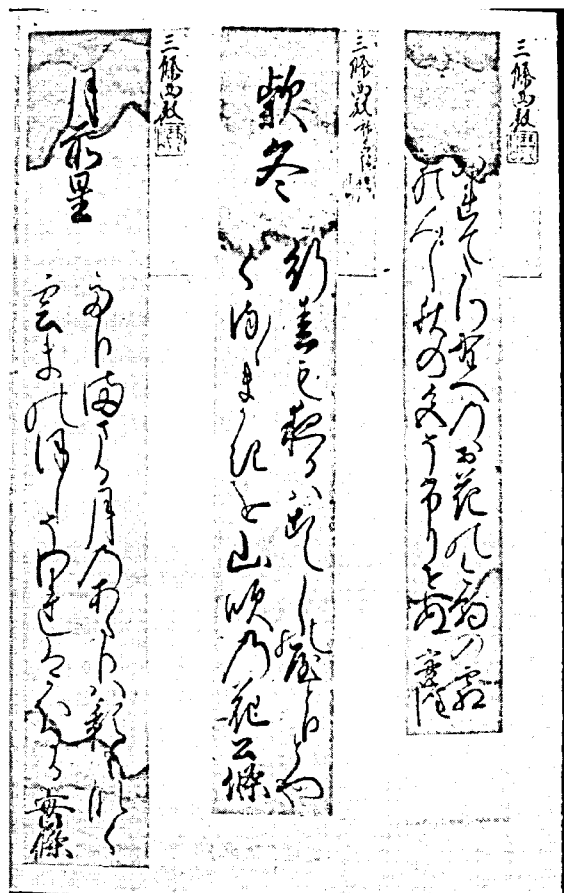


表 19 (55 四辻季遠 56 欠 57 四辻季経)

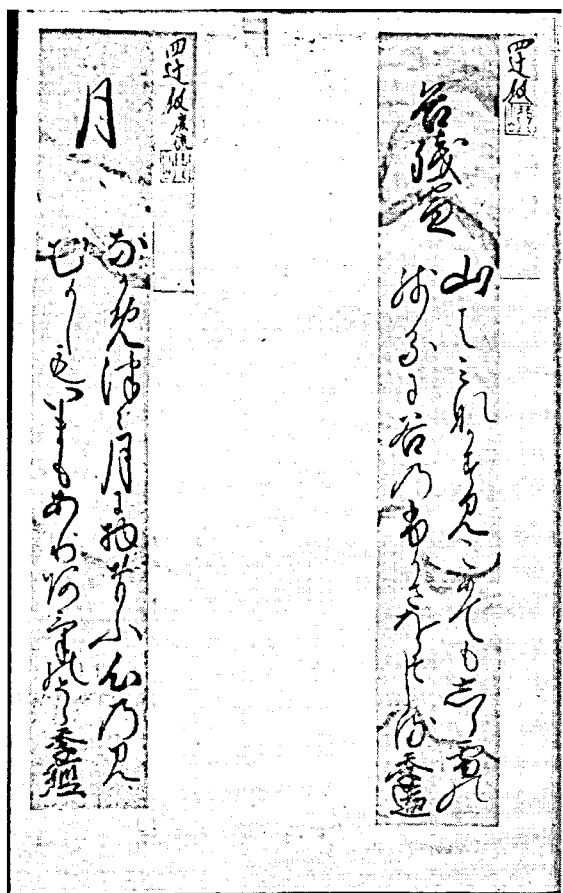


表 20 (58 滋野井教国 59 水無瀬氏成 60 水無瀬兼俊)

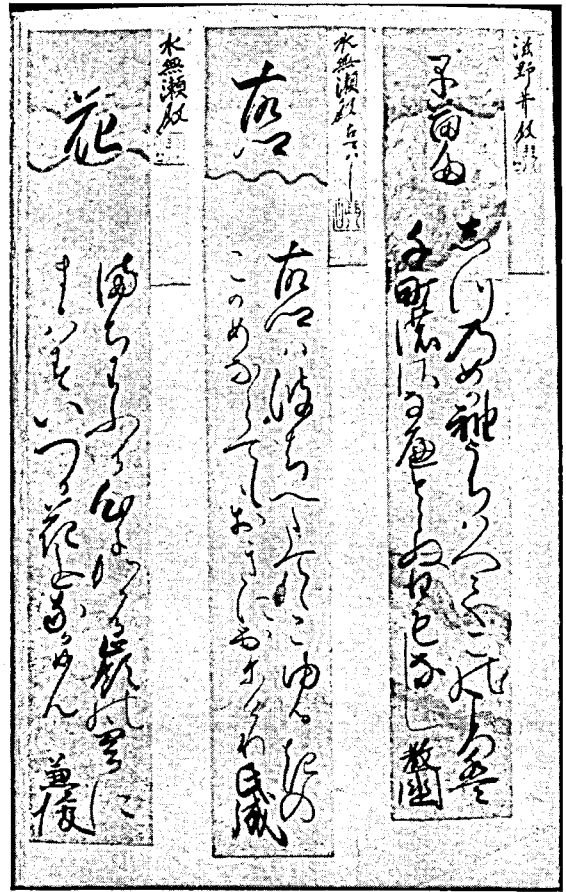


表 22 (64 冷泉政為 65 中山宣親 66 中山孝親)



表 21 (61 持明院基孝 62 持明院基時 63 冷泉為広)



表 23 (67 中山親綱 68 中山慶親 69 飛鳥井雅親)



表 24 (70 飛鳥井雅綱 71 飛鳥井雅春 72 飛鳥井雅庸)

飛鳥井 叙
 雪
 雪にぬれたる雪の成るる物なり
 雪にぬれたる雪の成るる物なり
 飛鳥井 叙
 春
 春にふくむる春の光なり
 春にふくむる春の光なり
 飛鳥井 叙
 扇
 扇として清く果たれど
 扇として清く果たれど

表 25 (73 欠 74 飛鳥井雅康 75 庭田重親)

飛鳥井 叙
 海
 海にぬれたる海の光なり
 海にぬれたる海の光なり
 庭田 叙
 海
 海にぬれたる海の光なり
 海にぬれたる海の光なり

表 26 (76 庭田重具 77 五辻為仲 78 五辻之仲)

庭田 叙
 風
 風にぬれたる風の光なり
 風にぬれたる風の光なり
 五辻 叙
 秋
 秋にふくむる秋の光なり
 秋にふくむる秋の光なり
 五辻 叙
 山
 山にぬれたる山の光なり
 山にぬれたる山の光なり

表 27 (79 中院通勝 80 欠 81 中院通純)

中院 叙
 海
 海にぬれたる海の光なり
 海にぬれたる海の光なり
 中院 叙
 海
 海にぬれたる海の光なり
 海にぬれたる海の光なり

表 28 (82 白川忠富 83 白川雅業 84 西洞院円定)

白川 忠富
 佛若
 身山花よりつる毛のうすゆへに
 三世の如くひてそよぶるはよむとさる

白川 雅業
 首夏
 花より乃ありとくはるを(秋
 影くましく夜てまはり 雅業

西洞院 円定
 枯松
 物帯りてとくふはあそまは
 志たふもれはたやうはて圓

表 29 (85 西洞院時良 86 薄以量 87 東坊城和長)

西洞院 時良
 舟
 舟はるる浪海のまよと名もせ
 舟は十年九夜うさむり 登

東坊城 和長
 舟
 志とまよとくふりあそまのまよに
 一海行りては舟はるるまよと和長

表 30 (88 三条実香 89 三条公広 90 高倉範久)

轉法輪 三條 実香
 婦鳩
 鳥のへふとまはつたをよき春に
 花にまはつてのゆかりはよき 實香

轉法輪 三條 公広
 花水
 うまかまをこまにみれば水は而小
 ゆりたうたつたのまはる廣

高倉 範久
 鹿野
 うまゆりゆりゆきをくは
 たりまはつては鹿やまじ 範

表 31 (91 鷺尾隆康 92 高倉永宜 93 姉小路濟繼)

鷺尾 隆康
 巨豆
 花のうまをまはつてはまはる
 まはるるまはつてはまはる 隆康

高倉 永宜
 桔同
 花のうまをまはつてはまはる
 まはるるまはつてはまはる 永宜

姉小路 濟繼
 舟
 舟はるる浪海のまよと名もせ
 舟は十年九夜うさむり 登

【凡例】

本解題の各短冊における丸付き数字ほかは以下を示す

①極札の表書の翻刻及び鑑定者名

②料紙の紙質

③推定書写年代

④伝称筆者の出自及び生没年

【翻刻】(判読不能な場合は推定文字数分「■」で充当した)

一、本解題の執筆に際して、『古筆手鑑大成(全十六卷)』・『日本書蹟大鑑(全二十五卷)』・『徳川黎明会叢書 古筆手鑑篇一〜五』などに代表される、古筆・短冊及び古筆手鑑の影印・翻刻本について、古筆切研究の根幹資料として周知の文献であると判断した場合には、原則として、著者(編者)や出版社名、刊行年次などの指摘を省略した。

1 後円融天皇

①「後圓融院」山琴(黒)「二代古筆了榮

②斐紙(雲紙に金銀泥の下絵)

③南北朝時代

④後円融天皇(北朝第五代天皇、後光厳天皇第二皇子、一三五九—一三九三)

【釈文】

さころものたちまふみちはしらね ■も
あまのはそてにかけし心そ

2 後小松天皇

①「後花園院」うりゆく山琴(黒)「二代古筆了榮

②斐紙(金銀の霞引に金泥の下絵)

③室町時代

④後小松天皇(北朝第六代天皇、後円融天皇第一皇子、一三七七—一四三三)

【釈文】

恨恋 うつりゆく松のひなきのたえしより
身を焔かせのすゑのまくす葉

3 後花園天皇

①「後花園院」山琴(黒)「初代古筆了佐

②斐紙(雲紙)

③室町時代

④後花園天皇(第一〇二代天皇、伏見宮貞成親王第一王子、一四一九—一四七二)

【釈文】

梅 春もなをあつむる雪とみえてけり
花の香さむき窓の梅かえ

4 後土御門天皇

①「後土御門院」山琴(黒)「二代古筆了榮

②楮紙か(雲紙)

③室町時代

④後土御門天皇(第一〇三代天皇、後花園天皇第一皇子、一四四二—一五〇〇)

【釈文】

天香 なつ衣ほす日もあれやさみたれの
具山 雲よりうへのあまのかく山

5 後柏原天皇

①「後柏原院」山琴(黒)「二代古筆了榮

②斐紙(雲紙に金箔、金泥の下絵)

③室町時代

④後柏原天皇(第一〇四代天皇、後土御門天皇第一皇子、一四六四—一五二六)

〔釈文〕

月はたゞむかふはかりのなかめ哉
こころのうちのあらぬ思に

6 後奈良天皇

①「後奈良院」**山翠**（黒）「二代古筆了榮

②斐紙（雲紙に金の霞引き、金銀泥の下絵）

③室町時代

④後奈良天皇（第一〇五代天皇、後柏原天皇第二皇

子、一四九七—一五五七）

〔釈文〕

よし野山花よりおくのしら雲や
かさなるみねの桜なる覧

7 正親町天皇

①「正親町院」**重** 分家初代古筆了榮

②斐紙（雲紙）

③安土桃山時代

④正親町天皇（第一〇六代天皇、後奈良天皇第一皇

子、一五一七—一五九三）

〔釈文〕

霜さゆる竹のさ枝にうつりきて
また春さむき鶯の聲 茶地丸

8 誠仁親王（陽光院）

①「陽光院」**山翠**（黒）「二代古筆了榮

②斐紙（雲紙に金銀泥の下絵）

③安土桃山時代

④誠仁親王（陽光院（追号）、正親町天皇第一皇子、一

五五二—一五八六）

〔釈文〕

ほし合の夕すゝしき天の河
もみちの橋をわたるあき風

9 後陽成天皇

①「後陽成院」**山翠**（黒）「二代古筆了榮

②斐紙（雲紙に金銀泥の下絵）

③江戸時代

④後陽成天皇（第一〇七代天皇、誠仁親王第一王子、

一五七一—一六一七）

〔釈文〕

花さそふあらしの庭の雪ならて
ふりゆく物は我身なりけり

【備考】 159

巻頭からの九葉は、第一〇一代天皇である称光天皇の短冊を除き、室町時代から江戸時代初期にかけての歴代天皇の短冊（震翰）と鑑定されたものが連なっている。

その多くが雲紙に金銀泥による下絵をはじめとした豪華絢爛な料紙を用いており、一般的な自詠の短冊にはあまり使用されることのないものである。当然、各天皇の署名はなく、その真贋は筆跡の検討が必要になつてくるが、概ねその書風を大きく外れるものではないようである。

その中でも「7 正親町天皇」では「茶地丸」との署名が見られ、天皇即位前に書かれたものと思われる。そのため雲紙のみの質素な料紙が用いられている。しかし、この「茶地丸」の名を幼名に持つのは後陽成天皇であり、正親町天皇とするのは誤りである。その書を「9 後陽成院」の短冊と比較すると全体的に線が重く軽快さを欠くが、「の」「て」などをはじめとした諸字において字形がよく類似する。ともあれ天皇即位である一五八六年以前の作であることが窺えよう。

また、「8 誠仁親王（陽光院）」の短冊は、一見一連の短冊と同じようであるが、『新古今和歌集』三三三に所収である西園寺公経（一一七一—一二四四）の和歌を書いた古歌短冊である。

付随の極札を通覧すると、古い鑑定家である二代古筆了榮（一六〇七—一六七八）のものが多く、比較的各天皇と近い時代に鑑定されていることも注目したい。

（野中）

10 後土御門天皇勾当内侍

- ①「後土御門院勾当内侍」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②打紙（雲紙）
- ③室町時代
- ④後土御門院勾当内侍（未詳細）

〔釈文〕

はなそともいさしらなみの色なから
にほひやしひきはるの山かも

③江戸時代

- ④智仁親王（誠仁親王（陽光院）第六王子、一五七九—一六二九）

〔釈文〕

待花
くらへみよたれかまさらむさく花の
遅きをかこつうたつはれを 智仁

しくれもまたぬ峯のみちは

15 近衛前久

- ①「近衛殿龍山」山琴（黒）「初代古筆了榮
- ②斐紙（雲紙、金泥と銀泥の下絵有り）
- ③江戸時代
- ④近衛前久（近衛植家男、号龍山、一五三六—一六一二）

〔釈文〕

あは雪のたまれはかてにくたけつゝ
わかものおもひのしけきころかな

11 貞清親王

- ①「伏見殿」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②斐紙（雲紙）
- ③江戸時代
- ④貞清親王（伏見宮邦房親王第一王子、伏見宮第十代、一五九六—一六五四）

〔釈文〕

初春梅
のとかなる世をころろにて咲梅の
花の匂ひや春のはつかせ 貞清

14 近衛植家

- ①「近衛殿植家公」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②楮紙（雲紙）
- ③室町時代
- ④近衛植家（近衛尚通男、一五〇二—一五六六）

〔釈文〕

をく露やそめはしむらむ秋山の

16 近衛信尹

- ①「近衛殿信尹公」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②具引き紙（金泥下絵、上部に銀泥で月の下絵）
- ③江戸時代
- ④近衛信尹（近衛前久男、寛永の三筆の一人、一五六五—一六一四）

〔釈文〕

めには見て手にはとられぬ月のうちの
かつらのことき君にもあるかな

12 智仁親王

- ①「八條殿」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②斐紙（雲紙）

17 九条幸家

①「九條殿」山琴（黒）「二代古筆了榮

②斐紙（雲紙）

③江戸時代

④九條幸家（九條兼孝男、一五八六—一六六五）

〔積文〕

年とへはわれもをくれてをきそふる

ひとの別のことのはの露 忠榮

18 九條道房

①「九條殿」山琴（黒）「二代古筆了榮

②斐紙

③江戸時代前期

④九條道房（九條幸家男、一六〇九—一六四七）

〔積文〕

花 咲つくりおくも猶みむ山路哉

かへる花にはよし暮ぬとも 道房

19 松殿道基

①「九條殿道基公」山琴（黒）「二代古筆了榮

②染紙（金泥の下絵有り、繊維が載っている箇所があるが詳細不明）

③江戸時代

④松殿道基（九條幸家男、一六一五—一六四六）

〔積文〕

わか門に千尋ある陰を植へれば

なつ冬たれかゝくれさるへき

20 二条康道

①「二條殿」山琴（黒）「二代古筆了榮

②斐紙（雲紙）

③江戸時代

④二条康道（九條幸家男、一六〇七—一六六六）

〔積文〕

海邊霞

橋たてや波も長閑に立籠て
入海とをく霞む春哉 康道

21 鷹司基忠

①「鷹司殿基忠公」山琴（黒）「二代古筆了榮

②打紙（雲紙）

③鎌倉時代（江戸時代か）

④鷹司基忠（鷹司兼平男、一二四七—一三三三）

〔積文〕

洞底松

谷ふかみ人もこたえぬまきの戸を
むなしくたゞくまつかせのこゑ

【備考】 10〜21

11、12は親王とされる短冊が並び、次いで13〜21は五摂家と極められた筆跡が連なる。

「10後土御門天皇勾當内侍」は、短冊上部の雲の上に題を擦り消したような痕が見られる。

13〜16は筆頭の近衛家の短冊が並び、殊に父子である「13尚通」と「14植家」の二葉の書風は相似している。『日本書流全史』掲載「本朝古今名公古筆諸流」などを鑑みるに、書流はわかるものの、連ねて記載されており、書風は類似していたと考えられる。一方、「15龍山」は植家の子にあたるが、前掲系図などでは龍山を大師流の流れに位置付けており、書風は似ていなかったようである。寛永の三筆の一人として知られる「16信尹」は龍山の子にあたり、書流の系譜もその流れにある。これらの二葉の真贋は不明であるが、書風の類似する点も見られ、そうした観点から各々龍山、信尹と極められたのではないだろうか。

17〜19の三葉は九條家とする短冊である。「18道房」と「19道基」は「17幸家」の子にあたる。この三葉を比較すると、それぞれ異なる書風で書写されているものの、近衛流を大きく離れる表現ではないようである。18には三つ折りの痕が見られるため、歌会で書写された短冊と考えられる。また本短冊には在原業平の歌が書写されている。「20康道」も幸家の子にあたるが、尊純流の書き手として知られている。本短冊は尊純法親王の筆跡とはやや離れており、自己の書を確立した時代に書かれたものと推定できる。

「21基忠」の短冊表面には、判読はできないものの経文の反転文字が見られ、注目すべき一葉である。しかし、署名はなく、自筆とは考えられない。（前川）

22 花山院定熙

①「花山院殿」**山翠**（黒）「二代古筆了栄

②斐紙（金泥の下絵）

③江戸時代

④花山院定熙（西園寺公朝男、花山院家輔の養子、一五五八—一六三四）

〔釈文〕

柳先 春雨のこす多分てや流ぬらむ

花菊 はなをもまたね青柳のいと 定熙

23 西園寺実晴

①「西園寺殿實晴公」**山翠**（黒）「二代古筆了栄

②斐紙（雲紙）

③江戸時代

④西園寺実晴（西園寺公益男、一六〇一—一六七三）

〔釈文〕

夏懐舊 夏ころもかろき形見と見るまでも

涙におもる袖の上かな 實晴

24 西園寺公義

①「西園寺殿」**山翠**（黒）「二代古筆了栄

②斐紙（雲紙）

③江戸時代

④西園寺公義（西園寺実晴男、一六二六—一六七〇）

〔釈文〕

春花つとかすみし色もこの比は

はなにわすみ吉野山 公義

25 四条隆術

①「四條殿」**重**「分家初代古筆了雪

②具引き紙（金の採箔と霞引き、金泥の下絵、銀の型

紋様）

③江戸時代

④四条隆術（四条隆昌男、一六一一—一六四七）

〔釈文〕

難波かた入江のあしのしもかれて

さやく嵐のやとりたになし 隆術

26 山科言継

①「山科殿」**山翠**（黒）「二代古筆了栄

②斐紙（雲紙）

③安土桃山時代

④山科言継（山科言綱男、一五〇七—一五七九）

〔釈文〕

松雪深

新端ふく松のあらしはうつもれて
見ぬ雪つくる下おれのこゑ 言継

27 欠

28 日野資勝

①「日野殿」**山翠**（黒）「二代古筆了栄

②斐紙（雲紙）

③江戸時代

④日野資勝（日野輝資男、一五七七—一六三九）

〔釈文〕

思性事

行としの身にしそはすはいにしへを
おもひ出つゝなにかしのはむ 資勝

29 広橋兼秀

①「廣橋殿」**山翠**（黒）「二代古筆了栄

②斐紙（雲紙）

③室町時代

④広橋兼秀（広橋守光男、一五〇六—一五六七）

〔釈文〕

鶯

うくひすの心もいまはうちとけて
こゑのとかなる春やしるらむ 兼秀

31 広橋総光

- ①「廣橋殿」山琴（黒）「二代古筆了栄
- ②斐紙（雲紙）
- ③江戸時代
- ④広橋総光（広橋兼勝男、一五八〇—一六二九）

〔釈文〕

秋夕 聞なるゝをしかの聲もわきて猶
あきの夕やわひしかるらむ 總光

32 広橋総光

- ①「廣橋殿」山琴（黒）「二代古筆了栄
- ②斐紙（雲紙）
- ③江戸時代
- ④広橋総光（広橋兼賢男、一六一六—一六五四）

〔釈文〕

磯千鳥 奥津かせうちより浪のひよきに
はなれてもさはく磯千鳥哉 総光

- ①「烏丸殿」山琴（黒）「二代古筆了栄
- ②斐紙（雲紙）
- ③江戸時代
- ④烏丸光宣（烏丸光康男、一五四九—一六一二）

〔釈文〕

時雨 遠山にみし一むらの雲や今
水端の姿にしくれきぬらむ 光宣

【備考】 22、33

本担当箇所は22、33のうち、二葉ほど抜けているが、西園寺家の二葉、広橋家の三葉をはじめとした公卿の短冊十葉が連なる。

抜けている二葉のうち、「26山科言継」と「28日野資勝」の間の箇所には、言継の子・山科言経（一五四三—一六一一）あるいは資勝の父・日野輝資（一五五五—一六二三）辺りが有力であろうか。対して、「29広橋兼秀」と「31広橋総光」の間の一葉としては、広橋家として両者の間は二代空いているため、広橋国光（広橋兼秀男、一五二六—一五六八）あるいは広橋兼勝（広橋国光男、一五五八—一六二三）のどちらかがあったものと思われる。

その配列を見ても「22花山院定熙」の父は西園寺公朝（一五一五—一五九〇）とその後の二葉と続くものである。また、「28日野資勝」の父・国光は広橋家の出身であり、家柄ももちろんであるが、この一群はその関係性も強い箇所のようである。

最後に「25四条隆術」の短冊の料紙は、ほかのものと比較すると一段と豪華である。通常自詠の短冊の場合、雲紙を用いた比較的質素な料紙であることがほとんどであるが、本短冊はそれとは異なるようである。もしかすると、複数人でこのような豪華な料紙に清書を行う機会があり、そのうちの一葉だったのかもしれない。

（張）

34 欠

35 柳原資定

- ① 「柳原殿」山琴 (黒) 二代古筆了榮
- ② 斐紙 (金銀泥の下絵)
- ③ 安土桃山時代

④ 柳原資定 (柳原量光男、一四九五—一五七八)

〔釈文〕

隣家鶏
とをからぬやとり有ともたひ枕
ゆふつけ鳥のこゑにこそしれ 資定

36 柳原■光

- ① 「柳原殿」山琴 (黒) 二代古筆了榮
- ② 斐紙 (雲紙)
- ③ 江戸時代か

④ 柳原■光 (柳原家で「■光」という名を持つのは八代目淳光 (一五四一—一五九七)、十一代目茂光 (一五九五—一六五四) である。)

〔釈文〕

山家月
かけかへす木の葉もちりて山さとは
冬こそ月のさかりなりけり ■光

37 柳原資廉

- ① 「柳原殿」山琴 (黒) 二代古筆了榮
- ② 斐紙 (雲紙)
- ③ 江戸時代

④ 柳原資廉 (柳原資行男、一六四四—一七二二)

〔釈文〕

別戀
千代までとおもひしこともいたつらに
わかれしきみかうつりかもなし 資廉

38 甘露寺親長

- ① 「甘露寺殿」山琴 (黒) 二代古筆了榮
- ② 楮紙 (雲紙)
- ③ 室町時代

④ 甘露寺親長 (甘露寺房長男、一四二五—一五〇〇)

〔釈文〕

寄絵恋
たちそふきゆるまもありうきみの
面かけを絵に書やとめまし 親長

39 甘露寺元長

- ① 「甘露寺殿」山琴 (黒) 二代古筆了榮
- ② 斐紙 (雲紙)
- ③ 室町時代

④ 甘露寺元長 (甘露寺親長男、一四五六—一五二七)

〔釈文〕

月前 よしやたゞ月にねぬよの女郎花
女郎花 たか谷いたし袖はふるとも 元長

40 甘露寺伊長

- ① 「甘露寺殿」山琴 (黒) 二代古筆了榮
- ② 斐紙 (雲紙)
- ③ 室町時代

④ 甘露寺伊長 (甘露寺元長、一四八四—一五四九)

〔釈文〕

亡戀
名残なくわするゝ中にうちとけし
われさへいまはつづく成ぬる 伊長

41 万里小路秀房

- ① 「万里小路殿秀房」山琴 (黒) 初代古筆了佐御法名
- ② 斐紙 (雲紙)
- ③ 室町時代

④ 万里小路秀房 (万里小路賢房男、一四九二—一五六三)

〔釈文〕

待月
小夜ふけて萩の上風吹をくる
月屋ほのかにいてんとすらん 等祺

42 万里小路惟房

①「万里小路殿」**山琴**（黒）「二代古筆了栄

②斐紙（雲紙）

③室町時代

④万里小路惟房（万里小路秀房男、一五二一—一五七三）

〔釈文〕

寄月戀
月もしれおもひくらへはつれなさは
あり明もなをいな霞の影 惟房

43 万里小路綱房

①「万里小路殿」**山琴**（黒）「二代古筆了栄

②斐紙（雲紙）

③江戸時代

④万里小路綱房（万里小路孝房男、一六一二—一六四一）

〔釈文〕

夏杜
夏の日に光やすらへは夕かけて
すずしくなりぬ森の下道綱房

44 勸修寺尹豊

①「勸修寺殿」**山琴**（黒）「二代古筆了栄

②斐紙（雲紙）

③安土桃山時代

④勸修寺尹豊（勸修寺尚頭男、一五〇三—一五九四）

〔釈文〕

忍久戀
数ならぬ身は年月も此まゝに
いはてこころに猶やつまむ 尹豊

45 勸修寺光豊

①「勸修寺殿」**山琴**（黒）「二代古筆了栄

②斐紙（雲紙）

③江戸時代

④勸修寺光豊（勸修寺晴豊男、一五七五—一六二二）

〔釈文〕

蛙
みなくちもわがれさりけり夕暮は
小田のかはつのをちこちのこゑ 光豊

【備考】 34、45

本担当箇所は34、45の十一葉（34欠）の短冊を収めるが、その内訳は柳原家が三葉、甘露寺家が三葉、万里小路家が三葉、勸修寺家が二葉と公家が連なっている。いずれも藤原北家を祖に持つ家柄であるが、さらに甘露寺家の支流である万里小路家と勸修寺家が続いて配されている点から見ても、手鑑行列に基づいた家格を意識した結果と言えよう。

基本的に料紙は雲紙が用いられ、装飾は施されていないが、「35柳原資定」の一葉のみ金銀泥による下絵が描かれた豪華なものになっている。また「38甘露寺親長」の一葉は、楮紙が用いられているようで、線がほかの短冊より荒れているように見える。より古い時代の短冊であるためか、本来は短冊とは異なる形式のものであったためか不明である。ただし歌題は本文より墨色が薄く、その筆跡も異筆であり、また歌題の頭に綴じていた痕も見られる。今後この点も含め、様々な可能性を探っていきたい。

「35柳原資定」の前の一葉が抜けているが、剥がされた痕跡が確認できるため、当初は何かの短冊が貼られていたようである。当然、資定より前の柳原家の誰かが入る可能性は否定できないが、「33鳥丸光宣」の長男である鳥丸光広（一五七九—一六三八）が入る可能性も考えられる。今号では掲載していない124に光広の短冊が見られるものの、その前後の配列には違和感があるため、更なる検討が必要になってこよう。

（高橋）

46 中御門宣秀

- ①「中御門殿」山翠（黒）「二代目古筆了榮
- ②斐紙（雲紙）
- ③室町時代
- ④中御門宣秀（中御門信胤男、一四六九—一五三二）

〔釈文〕

野眺望 舟つなく水もしつかに見えてけり
よと野のすゑのくれて行空 宣秀

- ④中御門尚良（中御門資胤男、初名宣隆・宣衡・成良、一五九〇—一六四二）

〔釈文〕

夕落花 ちる花の名残りをしはししたふより
匂ひをのこす夕風もかな 宣衡

49 高倉永相

- ①「高倉殿」山翠（黒）「二代目古筆了榮
- ②斐紙（雲紙）
- ③安土桃山時代
- ④高倉永相（高倉永家男、一五三一—一五八五）

〔釈文〕

邊橘 たちならふいく木か中もわきて匂ふ
花たちはなに風そまたるゝ 永相

50 高倉永孝

- ①「高倉殿」山翠（黒）「二代目古筆了榮
- ②斐紙（雲紙）
- ③江戸時代
- ④高倉永孝（高倉永相男、一五六〇—一六〇七）

〔釈文〕

寄橋戀 あはれしれ夢の浮橋かけてのみ
行きかへれとも逢夜あらねは 永孝

51 正親町三条公仲

- ①「閑院三條殿」山翠（黒）「二代目古筆了榮
- ②斐紙（雲紙に金銀泥の下絵）
- ③室町時代
- ④正親町三条公仲（正親町三条実福男、一五五七—一五九四）

〔釈文〕

幾とせもかはらぬ宿は梅か枝の
あら玉の色をさくやこの花 公仲

52 三条西実隆

- ①「三條西殿」山翠（黒）「二代目古筆了榮
- ②楮紙（雲紙）
- ③室町時代
- ④三条西実隆（三条西公保男、一四五五—一五三七）

〔釈文〕

かれてたつ野へのお花の今朝の霜
我みし秋の色そふりせぬ 實隆

53 三条西公条

- ①「三條西殿称名院」山翠（黒）「二代目古筆了榮
- ②楮紙（雲紙）

〔釈文〕

卯花 うの花のさけるかきねは夕やみも
さなから月の光なりけり 資胤

48 中御門尚良（宣衡）

- ①「中御門殿」山翠（黒）「二代目古筆了榮
- ②斐紙（雲紙）
- ③江戸時代

③室町時代

④三条西公条（三条西実隆男、一四八七—一五六三）

〔釈文〕

歎冬 行春も夜るはこえしのやとりとや
くるまかきを山吹の花 公條

56 欠

57 四辻季経

①「四辻殿庶流」山琴（黒）「二代目古筆了栄

②斐紙（雲紙）

③室町時代

④四辻季経（四辻季春男、一四四七—一五二四）

〔釈文〕

月 ながめつつ月に物もおもふ心のみ
むかしもいまもありあけのそら 季経

- ①「三條西殿」山琴（黒）「二代目古筆了栄
- ②斐紙（雲紙）
- ③江戸時代
- ④三条西実条（三条西公国男、一五七五—一六〇〇）

〔釈文〕

月前星 तरीまさる月のあたりは影もなく
雲まのほしそわれはかほなる 實條

55 四辻季遠

①「四辻殿」山琴（黒）「二代目古筆了栄

②斐紙（雲紙）

③安土桃山時代

④四辻季遠（四辻公音男、一五一三—一五七五）

〔釈文〕

谷残雪 山はみなかすみこめてもしら雪の
残るに谷のふかさをそしる 季遠

【備考】 46、57

本担当箇所は、中御門家、高倉家、正親町三条家、三条西家、四辻家の順で計十一葉が列んでおり、室町から安土桃山時代にかけての公家の短冊である。「51 正親町三条公仲」の短冊のみ金銀泥の下絵があるものの、いずれも雲紙のみの料紙を用いて書かれている。それぞれ署名を残しているが、「55 四辻季遠」と「57 四辻季経」の間の一葉が抜けており、もとは十二葉あったものと思われる。付随の極札は、いずれも二代古筆了栄のものである。

この一群には三条西実隆の作も含まれている。三条流の祖とされ、多くの流派が乱立した室町時代において、その書風の追随者は公家だけでなく、連歌師・僧侶・武家など、広範囲の階層にわたっていた。また、和歌においても、飯尾宗祇・東常縁から古今伝授をうけ、当代一流の文化人としても知られていた人物である。

本短冊は控えめな墨量ながら、筆の毛のバネを効かせた大らかな書きぶりで、落款の書風が一般的に見られるものより崩れているのが特徴である。実隆の落款は大きく分けて、「実隆」と、出家後の「堯空」の二つがあるが、点画はあまり省略せず、読みやすい造形で書かれているものが多い。書状に書かれた署名などと比較すると二十代後半から三十代にかけてのものである。また本短冊は、ほかのものと比較すると明らかに小さい。実見の範囲でも巻数などは確認できなかったものの、もとはまとまった歌集などであったものが、この一首のみ切り取られ、押されたものとも考えられる。

（谷口）

58 滋野井教国

- ①「滋野井殿」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②斐紙（雲紙）
- ③室町時代
- ④滋野井教国（滋野井実益男、一四三五—一五〇〇）

〔釈文〕

早苗多
しつめか袖うちはへてこのころは
千町のさなへとらぬ日もなし 教国

- ④水無瀬兼俊（水無瀬氏成男、一五九三—一六五六）

〔釈文〕

花
まわふる心にかゝる嶺の空に
まかはすいつる花をなかめむ 兼俊

61 持明院基孝

- ①「持明院殿」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②斐紙（雲紙に下絵）
- ③江戸時代
- ④持明院基孝（持明院基規男、一五二〇—一六一二）

〔釈文〕

旅夕立
あつき日の山路わけ入夕立に
旅の衣やぬれて涼しき 基孝

63 冷泉為広

- ①「冷泉殿」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②楮紙（雲紙）
- ③室町時代
- ④冷泉為広（冷泉為富男、一四五〇—一五二六）

〔釈文〕

籬にもさきはへたてしすきうしと
いひしこと葉の花のあさかほ 廣

64 冷泉政為

- ①「下冷泉殿」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②斐紙（雲紙）
- ③室町時代
- ④冷泉政為（冷泉持為男、法名曉覚、一四四六—一五二二）

〔釈文〕

谷水
さえし山のしつこのほりたに
かれ葉をとつる谷の陰草 曉覚

60 水無瀬兼俊

- ①「水無瀬殿」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②楮紙（雲紙）
- ③江戸時代

故郷
故郷は波ちへたてこゆるきの
こかめならでもおきに出にけり 氏成

62 持明院基時

- ①「持明院殿」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②斐紙（雲紙に下絵）
- ③江戸時代
- ④持明院基時（持明院基定男、一六三五—一七〇四）

〔釈文〕

朝若菜
のへとふくすそのにいてとてと人の
雪間をわけてわかなをそつむ 基時

65 中山宣親

- ①「中山殿宣親卿」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②楮紙（雲紙）

③室町時代

④中山宣親（中山親通男、一四五八—一五二七）

〔釈文〕

おもかけも待夜むなしき別にて
曉戀
つれなくみゆる有明の空

66 中山孝親

①「中山殿」山（黒）「二代古筆了榮

②斐紙（雲紙）

③安土桃山時代

④中山孝親（中山康親男、一五一三—一五七八）

〔釈文〕

逢まてといひし物かり今朝は又
後朝戀
ありしより猶そふ思ひかな 孝親

67 中山親綱

①「中山殿」山（黒）「二代古筆了榮

②斐紙（雲紙）

③安土桃山時代

④中山親綱（中山孝親男、一五四四—一五九八）

〔釈文〕

真萩原うつろふ秋をうらみつゝ
鹿
なきてやかへる野へのさをしか 親綱

68 中山慶親

①「中山殿」山（黒）「二代古筆了榮

②斐紙（雲紙）

③江戸時代

④中山慶親（中山親綱男、一五六六—一六一八）

〔釈文〕

吹たゆむ春風しるゝみるゝも
春月
かすみにこもる山のはの月 慶親

69 飛鳥井雅親

①「飛鳥井殿」山（黒）「二代古筆了榮

②斐紙（雲紙に下絵）

③室町時代

④飛鳥井雅親（飛鳥井雅世男、一四一七—一四九〇）

〔釈文〕

かしこきもいつへき時そおろかなる
述懐
身をおく山はよしやたつねし 雅親

【備考】 58～69

58～59には、権大納言や中納言などを歴任した滋野井家、水無瀬家、持明院家、冷泉家、下冷泉家、中山家、飛鳥井家の筆跡と鑑定された短冊が押されている。極札は筆跡から、いずれも古筆家二代目古筆了榮によるものだと思う。このうち58、64、66、67、68、69は、短冊を三つに折りたたんだ痕と、題の頭付近に小さな穴があいていることから、歌会の際に使用され書かれたものであると推測される。

63は冷泉家当主の冷泉為広の筆跡とされている。短冊の大きさは、室町時代に書かれたということから、江戸時代のものより小さいのが特徴的である。冷泉家は、御子左家の分家であり、藤原定家（一一六二—一二四一）の孫で、藤原為家（一一九八—一二七五）の子である藤原為相（一二六三—一三二八）を祖とする歌の家系である。伝来の典籍や古文書類が数万点に上り、冷泉家時雨亭文庫に所蔵している。下冷泉家は冷泉家の分家にあたるが、「64冷泉政為」の署名は、法名の「曉覚」となっていることから、出家した永正十年（一五一三）八月八日以降に書かれた晩年の書であると思われる。

65は署名が無いものの中山宣親と鑑定されている。宣親の署名がある短冊などと筆跡を比較すると、「む」字の懷を大きく書く点や、「き」字の三面目の縦画を長く書く点、「も（毛）」字や「な（奈）」字の字形が酷似するため、宣親の真跡であると思われる。

（田中）

70 飛鳥井雅綱

- ①「飛鳥井殿」山琴 (黒)「二代古筆了栄
- ②斐紙 (雲紙)
- ③室町時代
- ④飛鳥井雅綱 (飛鳥井雅俊男、一四八九—一五六三)

〔釈文〕

雪 うつもれぬなかめ成けり朝ほらけ
雲井はれたる雪のとを山 雅綱

- ③江戸時代
- ④飛鳥井雅庸 (飛鳥井雅敦男、初名雅継、一五六九—一六一五)

〔釈文〕

扇 立さらて結ふ泉もなにかせむ
あふきの色はみるにすゝしき 雅継

73 欠

74 飛鳥井雅康 (宋世)

- ①「飛鳥井殿」山琴 (黒)「二代古筆了栄
- ②斐紙 (雲紙)
- ③安土桃山時代
- ④飛鳥井雅春 (飛鳥井雅綱男、初名雅教、一五二〇—一五九四)

〔釈文〕

寄枕戀 夢にたに見るめおひせはよぬゝの
まくらのしたの海もたのまむ 雅教

72 飛鳥井雅庸

- ①「飛鳥井殿」山琴 (黒)「二代古筆了栄
- ②斐紙 (雲紙)
- ③室町時代

75 庭田重親

- ①「庭田殿」山琴 (黒)「二代古筆了栄
- ②斐紙 (雲紙)
- ③室町時代

〔釈文〕

秋の霜の後まてみゆる松かえは
君かちとせのまもりとそなる 宋世

- ④庭田重親 (中山宣親次男、庭田重経の家督を相続、一四九五—一五三三)

〔釈文〕

寄枕戀 なからへはまくらのしたの涙川
海にいてたるうきねをやせん 重親

76 庭田重具

- ①「庭田殿」山琴 (黒)「二代古筆了栄
- ②斐紙 (雲紙)
- ③戦国時代
- ④庭田重具 (庭田重保男、初名重頼、前名重通、一五四七—一五九八)

〔釈文〕

風前 ふくかせのゆくゑもにはほくれなぬの
落葉 梅にまかへてちれる紅葉々 重通

77 五辻為仲

- ①「五辻殿」山琴 (黒)「二代古筆了栄
- ②斐紙 (雲紙)
- ③安土桃山時代
- ④五辻為仲 (滋野井季国男、五辻諸仲の養子、一五三〇—一五八五)

〔釈文〕

都月 花にかすむ光を秋にみかきそへて
月そみやこの空にさやけき 為仲

80 欠

78 五辻之仲 (元仲)

- ① 「五辻殿」山琴 (黒) 「二代古筆了榮
- ② 斐紙 (雲紙)
- ③ 江戸時代
- ④ 五辻之仲 (滋野井公古男、五辻為仲の養子、初名実藤・元仲、一五五八―一六二六)

〔釈文〕

山家 庵かへてなをおく山と思ふこそ
またすてやらぬ心なりけれ 元仲

79 中院通勝 (素然)

- ① 「中院殿通勝卿」御法名 山琴 (黒) 「二代古筆了榮
- ② 斐紙 (具引きに金銀泥の下絵)
- ③ 江戸時代
- ④ 中院通勝 (中院通為男、法名素然、一五五六―一六一〇)

〔釈文〕

寄鳥戀 人そうきものいふ鳥はいふことのおなしすちをもこたへやはせぬ 素然

81 中院通純

- ① 「中院殿」山琴 (黒) 「二代古筆了榮
- ② 斐紙 (雲紙)
- ③ 江戸時代
- ④ 中院通純 (中院通村男、一六二二―一六五三)

〔釈文〕

澤虫 消やらぬ思ひありとや澤水の
うへにみたれて虫とふらむ 通純

【備考】70〜81

70から81までの十葉は飛鳥井家が四葉、庭田家が二葉、五辻家が二葉、中院家が二葉と室町時代から江戸時代にかけての公家による短冊が連なっている。「79 中院通勝」の短冊には金銀泥による下絵があるが、この一葉以外は雲紙のみの料紙に書かれている。また、本来ならば本担当箇所では十二葉あったと思われるが、「72 飛鳥井雅庸」と「74 飛鳥井雅康」の短冊の間、「79 中院通勝」と「81 中院通純」の短冊の間にそれぞれ一葉ずつ短冊を剥がした痕が確認できる。そのうち80にあったであろう一葉は中院通勝の子であり、中院通純の父である中院通村(一五八八―一六五三)が押されていたものと推察される。

また「70 飛鳥井雅綱」と「71 飛鳥井雅春」の短冊は父子で列んでいるが、その書風を比較するとよく似ていると言えよう。殊に「た」字や「の(能)」字をはじめめとして、文字の左側が下がり右側が高くなる点などが共通しており、その字形も酷似している。さらにこの二葉の料紙を比較すると、ほぼ同じ大きさであり、雲紙の色合いや折れ痕の位置なども一致している。そのほか、題の墨色および筆跡も一致することから、同じ探題方式の歌会で詠み、書かれたものではないだろうか。

「78 五辻之仲」は「77 五辻為仲」の養子であり、これも親子関係での列びとなっている。この二葉を比較すると、五辻之仲の書風は父為仲の影響が見受けられ、養子ではあるものの父の書風を踏襲していたことがわかる。

(神戸)

82 白川忠富

①「白川殿」山琴(黒)「初代古筆了佐

②楮紙(雲紙)

③室町時代

④白川忠富(白川伯王家、白川雅兼男、白川資氏の嗣子、一四二七—一五二〇)

〔釈文〕

佛名 身につもるつみものこらすゆく年は
三世のほとけもさそふうれしき 忠富

83 白川雅業

①「白川殿」山琴(黒)「初代古筆了佐

②斐紙(雲紙)

③室町時代

④白川雅業(白川伯王家、白川資氏男、一四八七—一五六〇)

〔釈文〕

首夏 花とりのなこりとみつる雲は猶
おなし空にて夏はきにけり 雅業

84 西洞院時慶

①「西洞院殿」山琴(黒)「二代古筆了栄

②斐紙(雲紙)

③江戸時代

④西洞院時慶(河鱒季富↓飛鳥井雅春↓西洞院時当の養子、法名円空、一五五二—一六四〇)

〔釈文〕

杜郭公 初音よりことゝなげほとゝきす
しのたのもりの千枝にいつかくて 圓空

85 西洞院時良

①「西洞院殿」山琴(黒)「二代古筆了栄

②斐紙(雲紙)

③江戸時代

④西洞院時良(西洞院時直男、一六〇九—一六五三)

〔釈文〕

寄杜戀 消はてむたくひはかなしかくとたに
つるにいはての森の下露 時良

86 薄以量

①「薄殿」山琴(黒)「二代古筆了栄

②斐紙(雲紙)

③室町時代

④薄以量(橘以盛男、一四三五—一四九六)

〔釈文〕

舟 うらゝなる浪路の末を見はたせは
つりの小舟も数まさり行 以量

87 東坊城和長

①「東坊城殿」山琴(黒)「二代古筆了栄

②斐紙(雲紙)

③室町時代

④東坊城和長(東坊城長清男、一四六〇—一五三〇)

〔釈文〕

つゆ しめをきてふりぬる宿の逢生に
ふかしいまさらつはし露ふかしとも 和長

88 三条実香

①「轉法輪三條殿」山琴(黒)「二代古筆了栄

②斐紙(雲紙)

③室町時代

④三条実香(三条公敦男、一四六九—一五五九)

〔釈文〕

歸馬 とこよへにすむへきものとたか春の
知春 空にしりてか帰るかりかね 實香

89 三条公広

- ①「轉法輪三條殿」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②斐紙（雲紙）
- ③江戸時代
- ④三条公広（三条西公国男、一五七七—一六二六）

〔積文〕

花浮水
うすかすむこずゑにみれば水の面に
ちりつくしたる花の色かな 公廣

90 高倉範久

- ①「高倉殿」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②斐紙（雲紙）
- ③室町時代
- ④高倉範久（四辻季経男、一四九二—一五四六）

〔積文〕

鹿聲 うき秋のひとりね覺をなくさめし
為丈 おなしおもひそ鹿も鳴くらむ 範久

91 鷺尾隆康

- ①「鷺尾殿」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②斐紙（雲紙）
- ③室町時代
- ④鷺尾隆康（四辻季経男、一四八五—一五三三）

〔積文〕

亡恋

いつのまにかくまで人のわすれ草
身をふる門に生しけりぬる 隆康

92 高倉永宜

- ①「高倉殿」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②斐紙（雲紙）
- ③室町時代
- ④高倉永宜（高倉永親男、一四六四—一五二六）

〔積文〕

杜間 すみれつむ杜の木かけのかり枕
莖葉 月をも花のゆかりやみむ 永宜

93 姉小路濟継

- ①「姉小路殿」山琴（黒）「二代古筆了榮
- ②斐紙（雲紙）
- ③室町時代
- ④姉小路濟継（姉小路基綱男、一四六九—一五二八）

〔積文〕

曉猿 ましらなく有明の月の山かけに
叫峽 おちゆく水の聲もすみつゝ 濟継

【備考】82〜93

本担当箇所である82〜93の十二葉のうち、そのすべてで雲紙が用いられ、金銀などによる装飾も見られない料紙である。

中でも、88、90、91、92、93は上部の藍色と下部の紫色の色合い、繊維の集まり具合、濃度、質感などが酷似している。このことから同一の料紙を用いて、同時期に書かれたものと想定できる。さらに、タテの寸法に多少の差が見られるものの、同じ高さに三つ折りの痕が見られ、題目の書風も二種類ほどに分類でき、歌題の頭の辺りに綴じてあったであろう痕も見られる。これらは、同じ歌会で用いられた短冊がまとめて保存され、それが後に本手鑑の一部となったと推し量られる。

ほかに、84、87、89にも同様の三つ折りの痕が見られる。これらは一括のものではないようであるが、実際に歌会で用いられた可能性は高く、歌題と歌の書風の比較をはじめ、検討を行う必要がある。

本箇所のうち、82、83の白川伯王家の二葉以外、極札は二代古筆了任によるものである。もしかしたら了任が本手鑑を作成するにあたり、いずこかに保存してあった短冊を持ち出し、埋めようとした痕跡ではないだろうか。

最後に、「82白川忠富」であるが、ほかの短冊よりも線が荒れているように見える。これは雲紙ではあるものの、ほかとは異なり楮紙が用いられているためと思われる。こちらも想像の域は出ないが、本来は短冊ではなく、卷子など別の形式で作られたものの一部が転用されたものであろうか。

【主要参考文献】

- ・小松茂美『古筆学大成（全三十卷）』（講談社 一九八九年）
- ・古筆手鑑大成編集委員会『古筆手鑑大成（全十六卷）』（角川書店 一九八三年）
- ・小松茂美『日本書蹟大鑑（全二十五卷）』（講談社 一九七八年）
- ・新編国歌大観編集委員会『新編国歌大観（全十卷）』（角川書店 一九八三年）
- ・久保田淳『和歌文学大系（全八十卷）』（明治書院 一九九七年）
- ・佐佐木信綱『日本歌学大系（全十卷）』（風間書房 一九五六年）
- ・久曾神昇ほか『日本歌学大系・別巻（全十卷）』（風間書房 一九五九年）
- ・徳川黎明会『徳川黎明会叢書 古筆手鑑篇一〜五』（思文閣出版 一九九五年）
- ・毎日新聞社至宝委員会事務局『皇室の至宝東山御文庫御物（全五巻）』（毎日新聞社 一九九九年）
- ・久曾神昇『物語古筆断簡集成』（汲古書院 二〇〇二年）
- ・古谷稔『古筆手鑑・披香殿』（淡交社 一九九九年）
- ・永青文庫『細川家永青文庫叢書 別巻 手鑑』（汲古書院 一九八五年）
- ・久保木哲夫ほか『古筆手鑑叢刊Ⅰ 宮内庁書陵部蔵 古筆手鑑』（貴重本刊行会 一九九九年）
- ・『出光美術館蔵品図録 書』（平凡社 一九九二年）
- ・伊井春樹氏・大阪大学古代中世文学研究会編『古筆切集 浄照房蔵』（和泉書院 一九八八年）
- ・橋本政宣編『公家事典』（吉川弘文館 二〇一〇年）
- ・石澤一志ほか『日本の書と紙 古筆手鑑『かたばみ帖』の世界』（三弥井書店、二〇一二年）
- ・村上翠亭・高城弘一他『古筆鑑定必携 古筆切と極札』（淡交社 二〇〇四年）
- ・『珠玉の書 短冊手鑑の世界』（MOA美術館 二〇〇二年）